

## 研究論文

# ボランティア・ツーリズム論の現状と動向

## —ツーリズムの新しい動向の考察—

### Concept and Significance of Volunteer Tourism: Its Impacts and Theory Framework

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学観光学部

キーワード：ボランティア、ボランティア・ツーリズム、ボランツーリズム、オルターナティブ・ツーリズム  
Key Words：volunteering, volunteer tourism, voluntourism, alternative tourism

## Abstract：

Volunteer tourism or voluntourism is today developing worldwide. There are estimated 1.6 million volunteer tourists a year nowadays. This paper surveys some issues of its theory framework focusing on the significance to tourism studies.

#### 序—ボランティア・ツーリズムの考え方と経緯

##### 1. ボランティア・ツーリズムの考え方

ここでいうボランティア・ツーリズム (volunteer tourism: 以下ではボランティア・ツーリストをいう場合も含む) とは、その理論的創始者といってもいいウエアリング (Wearing, S.) によると、「ツーリストであって、様々な理由から、その休暇を、何らかの仕方でボランティア活動のために、すなわち、何らかの形で困窮状態にある人々の援助や支援、種々な環境の維持・復旧、もしくは社会的環境の諸側面についての改善・調査・研究などの活動に従事するために、過ごすことをする者たち」のことをいう (W2; cited in D, p.30)。

ボランティア・ツーリズムは、今日では簡単に、「ボランツーリズム」 (voluntourism: 以下ではボランツーリストも含む) といわれることが多いが (M, p.204)、ボランティア・ツーリズムもしくはボランツーリズムとは、一言でいえば、「ツーリストであって、ツーリズムの過程で何らかのボランティア活動を行う者たち」のことをいうものである。

この点について、イギリスのアレクサンダー (Alexander, Z.) / バキル (Bakir, A.) は、幾人かの論者によるインターネット上などにおける実態調査の結果を参照し、2011年の論考で、それは要するに、「ツーリストとしてボランティア活動に従事するもの」 (engagement in volunteer work as a tourist) と定義されるもので、「ツーリストであること」、「ボランティア活動」および「従事すること」の3者が、基本的キーワードであるとしている (A1, p.14)。

ボランティア・ツーリズムについての考え方には、2つの方向がある。

第1は、ボランティア・ツーリズムは、あくまでもツーリストである者の行為である点に焦点をおいて、ボランティア活動の内容のいかんは直接的な問題とはしない考え方である。この考えによれば、結局、ツーリストがどのような考えをもってツーリスト活動を行なうかという、ツーリストの主体的な考え方に重点があるものとなる。ボランティア・ツーリズムでも、ツーリスト自身の考え方や行動のあり方、つまりツーリストの文化を問うものとなって、従事するのがどのようなボランティア活動であるかという、ボランティア活動の内容は、二次的副次的問題となる。

第2は、これとは逆に、ボランティア活動の内容がどのようなものかに照準を合わせるものである。この観点からすると、そのボランティア活動が、例えば環境保全を最大目標とする持続可能なツーリズムの推進であるのか、もしくは現地での教育活動従事であるのか、またはチャリティ・ツーリズムもしくはフィランソロフィ・ツーリズムであるのかといった点が焦点になる。それ故この場合には、ボランティア・ツーリズムは、実質的には、これらのものと一体化し、「オルターナティブ (alternative: 今1つの) ツーリズム」の1形態となることになる (W4, pp.194-195; W5, p.43; オルターナティブ・ツーリズムについて詳しくはΩ1, 29-32頁をみられたい)。

以上2つの方向は、ボランティア活動をする主体者側もしくは供給者側からの考察と、ボランティア活動がなされる客体側もしくは対象の側からの考察といっているものであるが、ウィケンス (Wickens, E.) は、ボランティア・ツーリズムの研究では、前

者の主体的立場からのものが本来的なものであると論じている (W5,p.44)。

ボランティア・ツーリズムの理念というべきものとしては、2005年ブラウン (Brown,S.) / レート (Lehto,X.) により提示された次の3点、すなわち「文化的没入」(cultural immersion)、「違いを作ること」(make a difference)、「友愛の探求」(seeking camaraderie) が有名である (B3; cited in W4,p.194)。ただし「違いを作ること」は、ボランティア・ツーリズムの実質的効果にかかわるものであるため、議論の多いところである (I,pp.211,219-220; F,pp.229-231)。

その一方、少なくとも海外のボランティア・ツーリズムでは、ツーリズム先は発展の遅れた国で、先進国からのツーリストのボランティア活動によって発展が可能になるものという考えに立脚するものであるから、これは要するに、先進国による発展途上国に対する指導という名のもとに行われる新植民地主義的傾向 (neo-colonialism) のものであるという見解もある (F,pp.224-226; W5,p.43)。

## 2. ボランティア・ツーリズムの経緯と現状

こうしたボランティア・ツーリズムは、歴史的にみると、すでに第二次世界大戦以前に萌芽があり、その起源は、1920年代にヨーロッパで発足した「国際市民奉仕団」(Service Civil International: SCI) にまで遡るといわれる。第二次世界大戦後において今日的意味でのボランティア・ツーリズム活動が、本格的に展開されるようになったのは、概ね1990年代以降で、ボランティア・ツーリストのなかには、若者ツーリズムの代表的形態であるバック・パッカー旅行から転じたものもある。ボランティア・ツーリズムは、2005年8月末アメリカ南部を襲ったハリケーン「カトリーナ」により大きな被害をうけたニュー・オーリンズなどでは、定着したものとなっているといわれる。

ただし、現在では、ボランティア・ツーリズムと名乗っている者たちのなかには、種々な理由で「観光(ツーリスト)ビザ」でとにかく入国することを目的としている者もあるが、その一方、「観光ビザ」で入国してはいるが、単なる観光客(ツーリスト)ではないというケースも多い。それ故、ボランティア・ツーリストは、入国・滞在の法形式からは、端的には「観光ビザで入国して滞在し、ボランティア活動を行っている者」というべきであるような場合もある。

従って、ボランティア・ツーリストであるかどうかは、当該ツーリストの考え方・活動・行動のいかんにより決まる度合いが強いから、それを、単なる観光客から区別することは、形のうえでは(例えば統計上で)区別することはかなり難しい場合がある。

だが、ボランティア・ツーリズムに対する関心は世界的にかなり高い。例えばインターネット上で「海外でのボランティア活動計画」(volunteer projects abroad) にヒットしたものは、2009年8月600万を数えた (D,p.31)。世界における実際のボランティア・ツーリズムの規模は、2008年(年間)、ツーリスト数にして160

万人、充当金額にして16億6千万ドル～26億ドルであったといわれる (B1,p.1; W4,p.194)。

これに照応して研究活動も次第に活発なものとなり、2009年6月「ボランティア活動とツーリズムに関する国際的シンポジウム」(International Symposium of Volunteering and Tourism) がシンガポールで開催されている。日本ではすでに2008年度観光研究学会で取り上げられ、中村憲治氏らにより研究報告がなされている (参照文献N)。

ボランティア・ツーリズムが盛んなイギリスの場合をみると、同国では大学入学までに一時的なブランクの期間がある。これはギャップ・イヤー (gap year) とよばれるが、この期間を使って海外旅行をする者が多くあり、そのなかにはボランティア・ツーリズムに従事する者が結構ある。このギャップ・イヤーを目当てにした事業は“ギャップ・イヤー・マーケット”といわれるが、その規模は2005年に50億ポンドに達しており、2010年には200億ポンドに及ぶものと予測されている (F,p.223)。

もとよりギャップ・イヤー旅行者のすべてがボランティア・ツーリストではないが、イギリスのフィー (Fee,L.) / ムデー (Mdee,A.) によると、同国の大学等では在学中に、あるいは卒業後に、こうした海外でのボランティア活動を兼ねた海外旅行を希望する者が結構ある (F,pp.223-224)。

ボランティア・ツーリストは、ボランティア活動というツーリスト自身の考え方や自発性に基づくものであるから、それには多様な形態がある (S1,p.53)。というよりは、多様性が何よりも特徴といっているものである。例えば、期間についていえば、長期的で半年以上にわたり、ビザも更新して従事する者もあれば、それが短期な者もある。また、ボランティア性に重点がある者もあれば、ツーリスト性に重点がある者もある。

イギリスのダルデニツ (Daldeniz,B.) / ハンプトン (Hampton,M.) は、2009年に行った長期志向的ボランティア・ツーリストの実態調査をふまえて、ボランティア・ツーリストといわれる者には、本来はツーリストであって、ボランティア活動に従事している者と、本来は専門的なツーリズム産業従事者であって、その仕事のかたわらボランティア活動に従事する者やそれに類するツーリストなどがあるから、これら両者は、これを区別する必要があるとして、前者を“BOLUNtourist” (以下では「ボラン・ツーリスト」という)、後者を“bolunTOURIST” (以下では「ボラン・ツーリスト」という) と名付けて、区別している (D,p.30ff.)。

ちなみにこの点について、ウィケンスは、主としてイギリスの場合を対象にして、“専門職的ボランティア” (professional volunteer) と、“ギャップ・イヤー・ボランティア” (gap year volunteer) とに分けている。前者は専門職的技能について本業として活動することを主たる内容とするもので、期間も1～2年と長く、原則として報酬を与えられるものである。後者は学生などの非専門職的ボランティア活動で、期間は1～6か月と短く、報酬はなく、逆に、斡旋機関や受け入れ機関等に手数的なものを支払うことを原則とするものである (W5,p.44)。こ

それは、上記のダルデニツ／ハンプトンのそれと分類観点が異なるものであるが、ボランティア・ツーリストに専門職的な者も含められることは共通する。

以下、本稿は、このうえにたつて、ボランティア・ツーリズムについて現在どのような分析・検討がなされているかを考察するものである。なお、参照文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所はその文献記号により本文中で示した。

ところで、ボランティア活動は、基本的には、余暇時間において行われるものであって、余暇活動の1つの形態と考えられる。こうした意味でボランティア活動そのものについて位置づけを行い、考察を試みたものに、何よりもステビンス (Stebbins, R. A.) の所論 (参照文献 S2) がある。その所論の中核的部分は、すでに別稿 (Ω4) で言及しているの、それと重複する部分があるが、ここではステビンスのボランティア活動の位置づけを中心に、その所説の概略についてレビューすることから始めたい。

## II. 余暇時間におけるボランティア活動の位置

### 1. ボランティア活動の位置

ステビンスは、余暇活動について「シリアスな」(serious: 真剣な) 分野と「カジュアルな」(casual: 成り行きまかせ的な) 分野とに分けることから出発する (S2, p.49ff.)。シリアスな余暇活動とは、何らかの目的意識的活動をいい、具体的にはアマチュア的活動 (amateurism)、趣味活動 (hobbyism)、ボランティア活動 (volunteering) の3種に従事するものである。これに対しカジュアルな余暇活動とは、それ以外の、特段の目的意識もなく、受動的無意味的に、漫然と過ごす余暇時間をいう。

シリアスな余暇活動は、自己の何らかの専門能力、熟練、知識、経験を生かしたもので、そうした能力の獲得・発揮・発展・展開に関連した分野や事柄に従事するものである。ここで「シリアスな」とは、例えば「熱心・意識的」(earnestness)、「一生懸命」(sincerity)、「真面目」(solemnity)、「意義重要」(importance)、「注意深さ」(carefulness)などをキーワードにするもので、それぞれの人が何らかの程度においてこうした志向性をもって従事する余暇活動である。

それは、広い意味での修練・鍛錬・研究などののちに身につく能力や熟練を前提とし、努力が行われるものという意味において、一種のキャリア (career) の形成・展開を内容とするものである。

これに対しカジュアルな余暇活動は、特別なキャリアの形成や展開を目指すことなく、いわばその時々々の欲求追求の思いのまま時間を過ごすような、あるいはただ漫然と時を過ごすだけのようなもので、例えば遊び (play)、うたた寝などのリラックス、ただ見るだけの娯楽、おしゃべりなどをキーワードにするものである。シリアスな余暇活動は実体・実質がある (substantial) 活動であるのに対し、カジュアルな余暇活動はそうした実体性・

実質性が乏しい。

このような余暇活動の2大種別は、ワン (Wang, N.) に従って表現すれば、制度化された余暇活動 (institutionalized leisure) と、そうでないものとの違いである (W1, p.14)。

ステビンスに戻ると、シリアスな余暇活動は、上記のように、ボランティア活動などを3大領域とするものであるが、次の6つの特質によって特徴づけられる (S2, p.52ff.)。

第1に、困難を乗り越えて進む忍耐、持続性 (persevere) があることである。

第2に、学習・訓練・修練によって上達するキャリア性があることである。

第3に、そのための努力を必要とすることである。

第4に、その結果、何らかの成果があり、それが、その人に達成感や自己実現感を与え、自己満足・自己充実感を可能にすることである。

第5に、このため人はそこに自己アイデンティティを見出し確保しうるものであることである。これはケケロが言った「威厳ある余暇時間」(leisure with dignity) に相当するものである。

第6に、ユニークなエトス (unique ethos) を持つことである。これは、組織的關係や拘束がない場において尊敬を受ける根源を作り出す精神性である。

その際ステビンスは、アンルー (Unruh, D.R.: 参照文献 U) に依拠して、1つの集まりなどの場合、ごく一般的にみると、それに関連する人々には4種のタイプがあるとす (cited in S2, p.54)。

第1はストレンジャー (strangers) で、当該集まりの活動について、裏舞台のいわば陰の部分で、その活動を支えている人たちであって、表面的にはほとんど見ることがない人たちである。例えばスポーツのアマチュア活動ではグラウンドの整備をする人たちである。

第2はツーリスト (tourists) で、余暇活動の観衆等として現れる人たちである。

第3はレギュラー (regulars) で、当該余暇活動の主役的な人たちである。

第4はインサイダー (insiders) で、当該余暇活動の専門的推進役となる人たち (devotees) である。

### 2. ボランティア活動の特色

ボランティア活動についてみると (S2, p.59ff.)、発端は、中世などですでにみられた寺院等への寄付行為や慈善的活動にあるとみられるが、近年におけるボランティア活動の高揚は、第二次世界大戦後一時盛んになった福祉国家論に遠因がある。

これによって社会福祉的活動は、国家を代表とする社会全体によって担われるものという考えが定着した。ところが、1980年代になってネオ・リベラリズム的思想が台頭し、「小さな国家」が叫ばれるようになった。自由主義的思想が前面にたち、国家主導を止めて、民間主導的な行政思想 (例えばリーガノミック

スなど)が可とされるものとなり、福祉的活動についても、国家行政としてのそれに代わって、民間を担い手とするそれが強く求められるものとなった。現在盛んなボランティア活動は、歴史的社会的にみれば、直接的にはこうした背景をもつものである。

しかも、現在のボランティア活動はさらに広い範囲のものとなっている。旧来主流であったのは、生活上もしくは身体上で支援を必要とする人々への支援を中心とする「必要を充たすボランティア」(needs volunteering)であったが、今ではそれはさらに広いものとなり、社会的に弱い立場の者をそもそも考え方において支援するような「思想的支援ボランティア」(ideological volunteering)も必要になっているし、さらに人種民族的偏見に反対することを支援する「人種民族的共同体ボランティア」(ethnic community volunteering)も不可欠となっている。

ただしボランティア活動では、本来の職業活動で獲得した技能を余暇活動時間でも発揮することができる。すなわち、本来の職業活動で得た専門的スキルをそのまま余暇時間でボランティア活動として発揮できるという特色がある。それ故、ボランティア・ツーリズムでは、既述のように、プロ的専門職的な人も含まれることになる。

次に、現在のボランティア・ツーリズムの実態がどのようなものであるかを、主としてダルデニツ／ハンプトンの、前記で一言した**ボラン・ツーリスト**と**ボラン・ツーリスト**を中心とした所説(参照文献D)に依拠して考察する。

### III. ボランティア・ツーリストの実態

#### 1. ボラン・ツーリストとボラン・ツーリスト

ダルデニツ／ハンプトンの所論は、**ボラン・ツーリスト**については、ニカラグアにおいて比較的長期にわたりボランティア活動をしている者を対象にしたインタビュー調査を基礎資料としたものである。これに対し**ボラン・ツーリスト**は、ニカラグアにおいてツーリズム産業に従事している者と、マレーシアのスキューバダイビングの専門的従事者たちが対象になっている。以上のほか、“*Caretaker Gazette*”誌等も参考資料とされている。

ニカラグアの**ボラン・ツーリスト**は、4か国から来ていた20人の者が対象であった(そのうちインタビューされたのは16人)。かれら20人の内訳は、フランスからの者11人、アメリカからの者7人、イギリスからの者1人、オーストラリアからの者1人で、年齢は23～38歳、多くが大学卒で、現地滞在期間は、短い者で3か月という者もいたが、典型的には6～12か月の長期で、地元NGO機関と連携している者が多かった。

これらボランティア・ツーリストたちの生活基盤をなす生活費・活動費の調達方法は様々で、例えばフランスからの者は、フランス政府の「国際ボランティア連帯基金」(Voluntarial Solidarité International: VSI)の財政的支援のもとにあり、フランス政府か

ら最低1か月154ユーロの給費を受け、年金資格などの社会的保証も得ていた。

他の国の者たちはすべて自費であったが、当該NGOのなかには、ニカラグアへの着任・離任の往復費用や、3か月ごとに必要になるビザ更新の費用は援助するよう努力していたものもあった。ニカラグアは、中央アメリカ国境協定(Central America Border Agreement)で、ビザ更新のためには一旦同国を出国することが必要であった。

マレーシアの調査対象であったスキューバ・ダイビング専門的従事者たちでは、ダイブ・インストラクター、ダイブ・マスター、マスター訓練生など22人がインタビューされた。かれらはカナダ、アメリカ、フィンランド、スカンジナビア3国、スイスから来ている者たちで、年齢は18～39歳、多くが大学生で、バックパッカーから転向した者もあった。

かれらのボランティア活動の場所は、気候によりタイ西部であったり、マレーシア東海岸であったりしたが、多くが3か月ごとのビザ更新を必要とする者であった。このうち、ダイブ・インストラクターは所定の給与を与えられる者で、いわば本職従事者であったが、他の者は自費生活者であった。ただし、かれらも、ダイブ・ショップの手伝いを行い、見返りに部屋代などを免除されることがあった。

ダルデニツ／ハンプトンの調査は、**ボラン・ツーリスト**と**ボラン・ツーリスト**とに分けて、まず、ボランティア活動をするようになった動機の調査から始めている(D, pp.35-36)。それは、**ボラン・ツーリスト**の場合、総合的には次のような順位であった。①自己の経歴を豊かにするなど、自己啓発(self-enhancement)的動機、②できる限り長期に旅行をし、海外生活をしたいという動機、③他に特になすことがなかったから、という動機、④何か有益なことをしたかったからという動機の順であった。

これに対し**ボラン・ツーリスト**では、その総合的順位は、①日常的な競争世界から逃避したかったから、②休暇の過ごし方がバックパッカーの延長のような気がして、気に入ったから、③できる限り長期に旅行をし、海外生活をしたいから、④他に特になすことがなかったから、という順であった。

これをみると、**ボラン・ツーリスト**では「キャリアの充実に努めたい」とする者が多いのに対し、**ボラン・ツーリスト**では「現実からの逃避」を挙げた者が最も多く、両者ではそもそも動機において違いがあることがみられ、興味深いものがある。また「他になすべきものがなかったから」という回答については、その順位は下の方であるが、こうした回答があること自体、ボランティア活動について必ずしも積極的意欲から従事しているのではない者があることを示しており、別の意味で注目されるものである。

さらに、ダルデニツ／ハンプトンによると、「何か有益なことをしたかったから」と答えたものは、**ボラン・ツーリスト**では、16人中11人であったが、それを第1の動機と答えた者は、一人もなかった。このことは、他の動機をも勘案して考えた場合、

こうしたボランティア・ツーリストたちに慈善主義的な利他的精神を求めることは、実際には「無いものねだり」となりかねないものであることを示している。これは、ボランティア・ツーリズムの1つの特徴であり、かつ、限界でもある。

## 2. ボランティア・ツーリズムの役割

こうした点にたつて、オーストラリアのイングラム (Ingram, J.) のように、ボランティア・ツーリズムでは、ボランティア精神、つまり博愛主義的利他主義の精神が強い者も確かにいるであろうが、それがかなり弱く、ボランティア・ツーリズムを隠れ蓑として、実際には利己的な、例えば海外旅行を長く楽しみたいといった願望を実現しようとしているだけの者 (ego-centricity) も多いのではないかという見解を提起しているものもある (1p.215)。

ニュージーランドのシュott (Schott, C.) も、ボランティア・ツーリストで究極的に目標になっているものは、「他人に対して善なることをするだけでなく、自己に対してもそうすることである」と言っている (S1p.54)。

では、ボランティア・ツーリズムの実際に果たしている役割はどうか。ダルデンツ／ハムプトンによると、ボラン・ツーリストの場合、積極的なメリットとして「当該地域の発展計画 (projects for development) へ関与すること」が挙げられている。逆に、デメリットとして「当該地域住民の職を奪うことになりかねないこと」や、「ツーリストたちと地域住民との間で摩擦や緊張が高まるかもしれないこと」などが指摘されている。

これに対しボラン・ツーリストでは、メリットとして「思わぬインパクトが生まれることがある」が挙げられている。デメリットとして、スキューバ・ダイビング業についてであるが、「地元のスキューバ・ダイビング業者では地元民の訓練に対し消極的になるかもしれない」ことや、こうした点に絡んで「スキューバ・ダイビング業務のあり方について地域外の専門家と地元従業者との間で摩擦・緊張が高まるかもしれない」ことなどが指摘されている。

これらの諸点を見ると、結局最も大きな問題は、ボランティア・ツーリストたちの登場により地元民の仕事がそれだけ少なくなるのではないかと、少なくとも地元民の間で危惧の念が起きるかもしれないことである。これは、ボランティア・ツーリストたちが個人的に善意で地元民のために行動をしても、それだけでは払拭できない問題である。

そこで、前掲のイングラムは、ボランティア・ツーリズムの意義は、ツーリズム先地域で何らかの貢献的活動をするところにあるとされているが、このことは実際には、絵空事であり、単なるキャッチフレーズであるにすぎないと批判し、かつ、ツーリズム先で「真の意味での」ボランティア活動をしよう (している) 者でも、結局、多くは先進国の考え方にたつ自分の考えを、ツーリズム先地域に押し付けようとしているものではないかと論評している (1p.216)。

こうした立場からは、ボランティア・ツーリズムも所詮、新植

民地主義的な傾向のものであるという主張が生まれることもやむをえないところがある。ちなみに現在では、植民地主義的傾向は、経済的領域ではなく、人々の考え方を含めた文化的領域で、まず起きる (起こさせる) というのが主流の見解である (A2, pp.100-101)。

これに対し、こうした「ボランティア・ツーリスト=新植民地化先兵」というべき見解を否定し、そのうえで、ボランティア・ツーリズムの真の効果はどこにあるかを論じたものに、フィー／ムデーの所説がある (参照文献F)。次にそれをレビューする。

## IV. ボランティア・ツーリズムの効果

### 1. 問題の定式化

ボランティア・ツーリズムは、イギリス等では、「ギャップ・イヤー・マーケット」とよばれることもあり、しばしば「その提供者者たちによる新植民地主義的傾向をもつもの」と批判されることがある。しかし、フィー／ムデーは、まず、こうした考え方は、昔流のステレオタイプ的な考え方であり、神話 (myth) というべきものであって、今日では妥当しない、と斥ける (F, pp.224-225)。

このうえにたつてフィー／ムデーは、「ボランティア・ツーリズムは、受け容れ国に否定的なインパクトを与えるものではない」と主張するが、しかし、イギリスのボランティア・ツーリズム関係機関のなかには、ツーリストの送り出し相手国の事情よりも、送り出すべきイギリスの学生たちの事情、要望、条件等に応えるものとなっていることを示すことに汲々とし、現地における活動の、少なくとも宣伝内容が、特に受け容れ国にとって是認できないものとなっていることがあるのは事実であり、改善されるべき点が多くあるのは、否定できないことである、と認めている。

しかし、フィー／ムデーは、ボランティア・ツーリズムについては、その本来の趣旨・精神からいっても、こうした現在の否定的事情をあげつらうことよりも、積極的側面や今後促進されるべき側面を明らかにし、それを強調することの方がはるかに重要である、という立場にたつべきことを主張している。

そこで、ボランティア・ツーリズムについて、例えばムデーらによって「市民社会を人間化しグローバル化するもの」(globalising, humanizing civil society) と規定されているものであることを改めて紹介し (cited in F, p.226)、ボランティア・ツーリズム論としては、例えば、個々のボランティア・ツーリストの適性いかんの問題などよりも、ボランティア活動によって実現される文化交流の集団的過程 (collective process of cultural exchange) に注目する方がはるかに肝要な事柄であると主張する。

ところで、フィー／ムデーの規定によれば、ボランティア・ツーリズムは、経済的分野においても、コミュニティ基盤ツーリズムの他の形態と連携することによって、受け容れ地域に対し、真の意味での大きな経済的利得 (economic benefits) をもたらすことがありうるものである (F, p.226)。この経済的利得を含めて、

ボランティア・ツーリズムの効果・メリットにはどのようなものがあるのか。これは、新植民地主義論批判に直接関連する問題である。

## 2. ボランティア・ツーリズムのメリット

フィー／ムデーは、まず、ボランティア・ツーリストたちにとってのメリットについて、ジョンズ（Jones, A.; 参考文献 J）に依拠して、それには次の3者があるとする。

①人間としての発展（personal development）：フィー／ムデーによると、近年、学生には情報化・国際化に充分対応できるようなソフト的熟練（soft skill）の修得が求められている。その場合ソフト的熟練とは、要するに、自己目標管理能力（self management）、チーム作業能力（team working）、問題解決能力（problem solving）、コミュニケーション能力（communication）、知識や技能の応用能力（application of literacy）、ビジネスを知っていること（business awareness）などを内容とするものであるが、それは国際的なボランティア・ツーリズム活動で最もよく修得されるものであり、かつ、現在では、それは学生の就職のうえで最も有力な武器になるものである。

②多面的文化的交流（cross-cultural exchange）：これはビジネスの世界などでも必須の事柄であるが、人間同士の実際の交流の場においてあらかじめそうした態度の涵養を必要とするものである。そのためにはボランティア・ツーリズムは最適である。

③グローバルな視点涵養（global perspective）：世界にはまだまだ富などにおいて不平等のあることなどを体験的に知り、そうした国際的観点をふまえたソフト的熟練を身に着けることが肝要であるが、それにはボランティア・ツーリズムは最適である。

次に、受け入れ地域が享受できるメリットについては、以下のように考えるべきであるとする。すなわち、例えば、ボランティア・ツーリズムによりその地域の人たちが貧困から抜け出せるかという考えは、とられるべきものではない。それは、明らかにボランティア・ツーリズムの射程外の問題である。それ故、ボランティア・ツーリズムでは「効果的」（effective）か、「非効果的」（ineffective）か、「搾取的」（exploitative）かどうか、考え方の基準になる。

「効果的」とは、例えばボランティア・ツーリストを含めてツーリストが当該地域で支出する貨幣などを、地域の発展等に効果的に使用することである。それには効率性という意味も含まれている。もともとでいえば、ボランティア・ツーリストははじめツーリストの所得支出は、現地にとって経済的メリットであるが、ボランティア・ツーリストではとにかく何らかのボランティア活動がなされるから、そうした活動を含めたボランティア・ツーリストの現地での貢献分が、効果的に適切に使用されることが必要である。

この点では、そうした貢献がいわゆる先進国の私的企業によって行われる場合でも、実質的意義は基本的には変わるところはない、とフィー／ムデーは論じている。要は、現地にとっ

て真に効果的に使用されることである。そうでないと、「新植民地主義」的なものとなることがある。

「非効果的」とは、逆に、例えば、ボランティア・ツーリストの送り出し機関と受け入れ側との間で意思の疎通が不充分、不完全であったために、ボランティア・ツーリストたちの行為が非効果的非効率的になることがないようにすることである。こうした場合、ボランティア・ツーリスト側で独自に事を進めることがないではないが、好ましいことではないとされている。現地側からすると非効果的となる場合がありうるからである。

「搾取的」とは、種々な意味でボランティア・ツーリストからの搾取的行為のみならず、送り出し機関（国）と受け入れ機関（国）との関係でもそうした行為がなされないことである。このことは、関係機関が私企業の場合特に問題となる。例えば、送り出し業務担当私企業がボランティア・ツーリズム希望者から不当な斡旋料等を徴収する場合などがないではないし、ボランティア・ツーリストが現地で安価な労働力として扱われることが、ないではない。

そこでイギリス等では、こうした事業に従事するものは、社会的目的で運営される「社会的企業」（social enterprise）にこれを限定することが望ましいという提案がなされているが、このことについても、現在のところ、意見の一致をみていない。いわゆる「社会的企業」には現在そうした能力が充分にはないという意見もある。少なくとも、それに反証する論拠は、今のところまだ乏しい、とフィー／ムデーは述べている（F, p.231）。

理論的には、「社会的企業」ははじめこの種事業従事機関の社会的貢献（social impact）はどのように測定されるかという問題がある。これは当該企業の「付加的価値」（added value）で測るべきものという主張があるが、現在のところイギリスでは、否定的意見が強い。代わりに「社会的監査」（social auditing）や、「バランス得点カード法」（balanced score card）や、「社会的投資収益率」（social return on investment: SROI）などの諸方法が提起されている。

このうち、社会的投資収益率は計算が複雑で実際的ではないという声がある。この点をふまえ、フィー／ムデーは社会的監査が適当であるとしている。これは、「搾取的でないもの」という基準は、いうまでもなく、ボランティア・ツーリズムの全過程にかかわる問題として考える必要があるという考え方からくるものであるが、この点についてフィー／ムデーは、「搾取的でないもの」という基準は、「新植民地主義論」に反論するうえで重要なテーゼであると強調したうえで、社会的監査について次のように論じている。

まず、社会的監査とは何かについて、フィー／ムデーが提起するものは、ボランティア・ツーリスト送り出し機関について、その活動計画や運営内容などを相当な公的機関が審査し、適確な者に証明書を交付して、公的に保障をするというものである。こうした制度は、商品一般を対象にしたものでは、イギリスではすでに1980年代ごろからFLO（Fair Trading Labelling

Organisation) などが活動を行なっているが、申請や証明書交付の費用が高つくき、発展途上国側では対応が困難で、改善が必要という声があった。

ボランティア・ツーリズム関係事業については、イギリスのある NGO 機関から提起されている「責任あるボランティア活動協会」(Responsible Volunteering Association: ReVA) の設立の案が注目されている。この協会案によれば、短期のボランティア・ツーリズム希望の学生等も安心して海外でのボランティア活動計画を立てることができるし、受け入れ側としても事が容易になるものといわれている。搾取がない、ボランティア・ツーリズムが可能になり、ボランティア・ツーリズムがさらに広まり進展することが期待される、とフィー／ムデーも結論づけている。

以上で概述したボランティア・ツーリズムの動向のなかで、その理論化の方向は、まだ緒についたばかりであるが、次に、現在の試みの一端をアレクサンダー／バキルの所説(参照文献 A1) に依拠して考察する。

## V. ボランティア・ツーリズム理論化の試み

アレクサンダー／バキルの説は、既述のように、ボランティア・ツーリズムを「ツーリストとしてボランティア活動に従事するもの」と定義するものである。かれらによると、ボランティア・ツーリズムは、この定義に基づき「ツーリスト」「ボランティア活動」「従事すること」の3者に分けて理論展開がなされるものであるが、そのなかでも究極的にキーポイントになるものは、「従事すること」であるとし、その検討から論を始めている。

### (1) 「従事すること」(engagement) について

アレクサンダー／バキルによると、「従事すること」とは、さしあたり「参加すること」(participation)であり、「行動すること」(action)であるが、それは「統合をはかること」(integration)を意図したものであって、「そのものへの浸透を図ること」(penetration)であり、その際相互に「交互作用が起きるもの」(interaction)で、自らがそれに「包摂されること」(involvement)であり、かつ、「没頭すること」(immersion)である(A1,p.14)。

それ故、ボランティア・ツーリズムは、アレクサンダー／バキルによると、何よりも物事に対し自らの問題として参加し、行動し、実践することであるから、理論的にはさしあたりまず、アーリ(Urry,J.)らの「ツーリズムは見る目(gaze)の違い」から生まれるというテーゼに反対というものである。ボランティア・ツーリズム論の創始者といっていいウエアリングは、近著において、少なくとも今日のツーリズム一般について、「ツーリズムとは体験すること」(experience)であると強調し、アーリの説に反論している(参照文献 W3; 詳しくはΩ1, 第1章)。

しかし、アレクサンダー／バキルは、それにとどまらず、ボランティア・ツーリズムでいう「従事すること」とは、単なる体験や他人との交互作用にとどまるのではなく、何らかの意味ある仕方では人と結び付くことであるとする。それも通例としては、

単数の人間同士の個人的な結び付きではなくて、複数人レベルを前提にした結び付きである。

ちなみに、engage もしくは engagement という事柄は、他の学問分野・実践分野においても主要なものとして取り上げられてきた考え方である。ただし、名称・用語は異なったものとなっていることが多い。例えば経営学では、従業員を事業の意思決定に参加させること(経営参加)によって仕事の意欲が向上することが主張されてきたが、これなどは基本的にはここでいう engage の考え方と同種のものである。

教育学では、ケアスレー(Kearsley,G.)／シュナイダーマン(Schneiderman,B.)によって、1998年“engagement theory”をテーマにする論考が発表されている(参照文献 K)。そこでケアスレー／シュナイダーマンは、engagement とは要するに、[関連づけること(related) — 創造すること(create) — 捧げること(donate)]であるとしているが、これに対しアレクサンダー／バキルは、次のように論じている。すなわちボランティア・ツーリズムの場合には、ケアスレー／シュナイダーマンのシェーマで最初と最後の段階である「関連づけること」と「捧げること」はそのまま継承できるが、中間の「創造すること」は、これを「協賛すること」(dedicate)に変えることが必要である。

というのは、ボランティア・ツーリズムは何かを創造することよりも、ボランティアとして参加している事柄の目的達成のために、自らを、つまり自らの知識や技能を捧げるところに、基本的意味があるからである。そもそもボランティアは、自分が好むものを作り出すところに意義があるのではなく、あくまでもボランティア対象である事柄についてその目的達成を支援することを使命とするものである。それ故、ボランティア・ツーリズムにおける engagement は、ケアスレー／シュナイダーマンに依拠してこれを定式化すれば、[関連づけること—協賛すること—捧げること]と表現できるものである。

### (2) ボランティア活動(volunteer work) について

アレクサンダー／バキルのボランティア活動についての考え方の一端は、すでに既述のところであるが、かれらによると、ボランティア活動は次の5点において特徴づけられるものである(A1,p.17ff.)。

① 選択可能性があること: ボランティア活動者は、どの仕事や業務に就くかを自ら選択できる。これは、ボランティア活動をするかどうかの決定も含むものである。選択の自由があることは、ボランティア活動の根本的屬性である。今日では、選択の幅・範囲は、一般的には、従前よりも広いものとなっているが、しかし、ボランティア・ツーリズムでは、他のボランティア活動よりも、一般的には、選択の自由は小さい。前提である選択の幅が、そもそも狭いからである。

② ボランティア活動の領域(range): 一般常識的には、ボランティア活動の対象は、生活困難者や通常活動困難者に対し援助が必要な事柄について支援することを始め、植物・動物や建造物等の消滅・崩壊・衰退などを阻止するための活動、

災害時の救援活動などであるが、ボランティア・ツーリズムでもこの点では大差がない。ボランティア活動の中心的理念は、中世以来変わるところがない。困った状態にある人・動物・植物・建造物等に対する博愛主義的支援行為である。

③金銭的支出 (payment) :ここで問題であるものは主として、博愛主義的支援行為として拠出される金銭である。少なくともボランティア活動の一環として募金活動は広く行われており、そうして得られた慈善的収入の一部が、ボランティア活動自体の費用の一部に充てられることは、広く認められていることであるが、搾取的なものになることは許されない、という点が眼目である。これらのことは、当然、ボランティア・ツーリズムにも妥当する。

④時間 (time) :ボランティア活動は基本的には余暇活動であるから、このことによる時間的制約がある。

⑤目的 (purpose) :上記のボランティア活動領域②のなかで、それぞれのボランティア活動者が選択したものが、直接的には当該ボランティア活動者の活動目的となる。

### (3) 「ツーリストであること」(tourist) について

ボランティア・ツーリズムでは、ツーリストであることが必須の前提である。それはあくまでも、ツーリストであってボランティア活動をするものであり、ある意味では、ツーリストとして何らかの期待をもって、ツーリズムの一環としてボランティア活動をするものである。ボランティア・ツーリストにおいてツーリストであることからおきる事柄は、アレクサンダー／バキルによると、主として次の4点である (A1,p.18ff.)。

ただしそのなかには、ボランティア・ツーリストであるが故に生まれるものもあれば、ツーリスト一般として生まれるものもある。ここでのアレクサンダー／バキルの論述は、両者について一体で展開されているところがあり、この個所は、かれらの「ツーリストとしてボランティア活動に従事する者」というボランティア・ツーリスト論の結論的特徴を論じたものとなっている色彩が多分にある。

①ツーリストとしての期待感 (expectation) :ここでいう期待とは、義務的なものも含むものである。例えば海外渡航に必要な手数料など費用の支払いの義務があることや、ツーリストとして旅行できる時間は限定されることなどが含まれている。このことは、換言すれば、ボランティア・ツーリストは、そうした期待が持たれている存在ということの意味する。総括的にいえば、ここでは、ボランティア・ツーリストは、一般の通常のツーリストではできない経験ができるかもしれないというメリットがある一方、ボランティア活動者として果たすべきことを期待された存在でもあるということが、改めて規定されているのである。

②ツーリストたるための問題 (issues, assumptions) :ここでいう問題には、実際には、ボランティア・ツーリストであるためのいわば条件を示したものが多い。例えば、ツーリストとしてボランティア活動をしても原則として報酬はないことである。他方では、ツーリストであるためにツーリズム上で厄介な問題が起きること

がある。例えば、交通の便が良くない所にも行かねばならないことがあるが、それを理由にボランティア活動を中止するのは難しい場合がある。ボランティア・ツーリストとしては、旅行上で乗り越えなければならない障害があることが予想される。

③動機 (motivation) :これも実際にはツーリストとしての動機と、ボランティア・ツーリストとしての動機が併存する形の記述となっている。ツーリストとしての動機では、例えば非日常的なことをしたいとか、他の文化に触れてみたいといった動機がある一方、ボランティア・ツーリストとしては、世の中のことに役立ってみたいとする動機があるはずであるといった点が指摘されている。

④インパクト (impact) :ここでインパクトとして挙げられているものには、ツーリズム一般の発展による、例えば地方の歴史的文化的社会的環境の変化もあれば、ボランティア・ツーリズムの発展によるメリットもしくはデメリットもある。後者では、ツーリストとしてのネットワークが大きくなることや、達成感が生まれることなどが挙げられている。

インパクトとしては、ボランティア・ツーリストたちの行動面、態度・能力などの面、心情的感情的な側面、身体的条件の面などが考慮されるべきことが論じられている。その一環としてアレクサンダー／バキルは、アフリカ・マラウイの某学校で教頭先生 (head teacher) が、西欧のボランティア・ツーリストに来てもらう方が、現地教員よりコストが安くつくので、来てもらっている、と語った例を紹介している (A1,p.24)。ボランティア・ツーリストについて搾取的なことがまだまだ行われている事例である。

ボランティア・ツーリズムの理論化のためのアレクサンダー／バキルの所説は、大要以上である。かれらは最後に、この枠組みは、状況への適応性 (fitness to the situation) があるから、それに基づく分析力 (workability) および新規データに対する適応力 (modifiability) があるものと結論づけている。本稿では、このうえにたって、次に、ボランティア・ツーリズム論の今後の課題になるものについて、ベンソン (Benson, A.M.) がどのように論じているかをレビューする (参照文献 B1, B2)。

ベンソンは、イギリス・ブライトン大学所属のツーリズム論学者で、「ツーリズム・レジャー教育学会」(the Association for Tourism and Leisure Education; ATLAS) のなかの「ボランティア・ツーリズム研究部会」(the ATLAS Volunteer Tourism Research Group) の創始者であり、現代表者である。

## VI. 現代ボランティア・ツーリズム論の課題

ベンソンは、ボランティア・ツーリズム論においても、これまでのところでは実態解明的 (exploratory) なものが多かったが、今や理論的アプローチが必要な段階になっていることを方法論的出発点として、現在研究が特に必要とされる課題領域には、まず大別して以下(1)～(3)のような3者があるとする (B2,p.240ff.)。



### (1) ボランティア・ツーリズムの研究をより大きな枠組みのもとで進めること

これは、細別すると、次の5つの課題に分かれる。

第1に、他の学問領域との連携を深め、ボランティア・ツーリズムの研究をより大きな学際的な枠組みのもとで進めることである。このことが、イギリスでも現在では実に不十分である一例として、イギリスで2010年刊行されたロチェスター(Rochester, C.)らの書“*Volunteering and Society in the 21st Century*”(参照文献R)が挙げられている。ベンソンによると、ここではvolunteer tourismという言葉は1回しか出てこないが、それとは無関連にステビンスのいう“serious leisure”については多くの論述がなされている。このことは、本稿筆者のみとここでは、何よりもボランティア・ツーリズムがボランティア活動として認められている認識程度の低さを物語るものである。

第2に、ボランティア・ツーリズムの観点からは、ボランティア・ツーリストの送り出し機関となっている、総称して「第三セクター」といわれるものの育成・発展が促進されるよう研究が深められるべきことである。

第3に、理論的領域では、ボランティア・ツーリズムは究極的には持続的発展(sustainability)の命題に立脚するものであり、オルタナティブ・ツーリズムの1形態であるから、この観点にたつて多面的な学際的な研究が推進されるべきことである。ベンソンによれば、こうした観点から必要とされる、例えば社会(学)的研究、経済(学)的研究、環境(学)的研究などを包括した学際的アプローチすらも、ごく低い段階(infancy)にある。

第4に、気候変化(climate change)にともなう環境変化にもつと注意を向け、環境保持に志向したボランティア・ツーリズムが展開されるようにすべきことである。

第5に、ボランティア・ツーリズムと他のツーリズム形態との関連をさらに深めるような取り組みが必要なことである。他の形態として、例えば若者のバック・パッキング・ツーリズムがあるが、ベンソンは、特にスポーツに関連したツーリズム、すなわちスポーツ・ツーリズムに目を向けることが重要であるという。ここでは「スポーツ・ツーリズム・ボランティア活動」といっていいボランティア・ツーリズム活動が行われているが、それについては研究がほとんどなされていない。

### (2) ボランティア・ツーリズム部門自体における差し迫った諸問題の研究

これも、細別すると、次の6つの課題に分かれる。

第1に、ボランティア・ツーリズムの定義、範囲、用語、量的測定技術について研究を深めるべきことである。まず定義についてみると、本稿冒頭で紹介したウェアリングの古典的定義があり、今日でも一般的には妥当なものとされているが、批判的見解がないものではない。特に統計的観点からは検討が必要という意見がある。というのは、例えば、ボランティア活動に従事したかどうかは、事後でしか確定できないという事情が

あるし、その判断もツーリスト自身の自己申告でいいものか、ボランティア活動先の証明のようなものが必要かどうかといった問題がある。上記で量的測定技術といったものにはこうした問題も含まれる。

第2に、金銭の問題(question of money)がある。イギリスのボランティア・ツーリズムでは、必要経費はツーリストが負担すること(payment by the volunteer)が原則であるが、そうした場合、ツーリストの支払う額が適正かどうか。その資金をツーリストはどのように調達しているのか。それが高額の場合にはボランティア・ツーリストになれる者は限定されてくるのではないか。また、このことによりボランティア・ツーリストたちの意識に変化がおきることがあるのではないか。すなわち、自分たちを顧客として、つまり「金(かね)を使うツーリスト」(spending tourist)として意識するようなことがあるのではないか、といった問題がある。

第3に、ボランティア・ツーリストの活動のレベルがそれ相当に優秀なものかどうかの問題がある。ボランティア活動としても優秀なものであることが望まれるが、その判断はどのようにしたらいいのか。その1つの方法として、ベンソンはサーブクウォール(SERVQUAL)を挙げているが、本稿筆者の試見によれば、これは本来プロ的サービス機関を対象にしたものであり、ボランティア活動にそのままの形で適用するには無理があるように思われる(サーブクウォールについて詳しくはΩ2, 31-35頁をみられたい)。

第4に、企業の責任(corporate responsibility)の問題がある。これは直接的には、企業が自企業従業員をボランティア活動に従事させるような場合が前提であるが、従業員の活動により当該企業が利得を得ることもある。例えばアメリカのアースウォッチ社(Earthwatch)では2006/07年度企業所得の約70%がボランティア基金から生まれたものといわれるが(B2,p.245)、このような場合、少なくともそれは企業の社会的責任を果たす行為であるかどうか、問われるものとなる。

第5に、テクノロジー(technology)の問題がある。これは直接的には、ボランティア・ツーリストたちがその活動において使用する備品や用品等が、できる限り最新で有能なものであるかどうかの問題である。特に最新の情報技術を備えた物品を駆使できることが望ましい。

第6に、リスクの問題がある。リスクには自然災害などで起きるものもあるが、治安が悪いなど社会的事情で起きるものもある。そうした危険にどのように対処するかは、ボランティア・ツーリストでは不可欠の対応課題である。現在では、組織的対応は全く不十分である。

### (3) ボランティア・ツーリズムにおける主たるステークホルダーの掌握

こうしたステークホルダーには、直接的に関連を持つものだけでも、少なくとも次の4者がある。

第1に、ボランティア・ツーリスト自身がある。この点の解明は、本稿のここまでの論述からも理解されるように、比較的進んだものとなっているが、ベンソンによると、次の2点でさらな

る研究が望まれる。1つは、ボランティア・ツーリストの類型化が遅れているので、それをさらに進めることである。ボランティア・ツーリストには現在比較的若年層が多いが、今後これほどになるのか、分析が必要とされる。ボランティア・ツーリストでも、例えば加齢によりライフサイクル的变化が起きるのか、などは重要問題である。今1つは、以上と関連して、ボランティア・ツーリストの長期的観点からの育成についての研究が必要とされることである。

第2に、受け入れ地域がある。この点については、ツーリズム一般の観点からの研究は進んでいるが、ボランティア・ツーリズムの視点からのそれは遅れている。なかには、ボランティア・ツーリズムをもって新植民地主義の1つという議論もある。大いに論究されるべき課題である。

第3に、政府 (governments) がある。地方公共体を含め、政府がボランティア・ツーリズムに対しどのような方針・態度をとるかは、ボランティア・ツーリストの活動にとって相当程度決定的な意味をもつ。例えば、入国ビザが拒否されるような場合には、入国すら不可能となる。しかしこの領域の研究は、これまでのところ、あまり進んでいない。

第4に、ボランティア・ツーリズムに関する諸組織がある。組織そのものやボランティア活動もしくはツーリズムに関する組織の研究は進んでいるが、ボランティア・ツーリズムの組織に関する研究は遅れている。ボランティア・ツーリズムの送り出し機関・組織には、私営の営利原則で動くものもあれば、そうではない第三セクター的なものもあるから、そのいずれがより望ましいかという問題があるし、それ以外にも、ボランティア活動希望者が容易にアクセスできる存在になっているかどうかといった問題もある。それ故、ボランティア・ツーリズム論では、各組織のマネジメントのあり方も問題となる。

ベンソンの論述は、大要以上である。かれは最後に重ねて、ボランティア・ツーリズムは急速に広まっているが、体系的なアカデミックな研究は緒についたばかりで、その研究の進展には多くの学究たちの関与が望まれると結んでいる。これがボランティア・ツーリズム論の全体的現状を雄弁に物語った言葉と思われる。

## Ⅶ. 結—ボランティア・ツーリズムの意義について

わが国では、ボランティア活動は結構盛んである。特に1995年の阪神大震災のころから本格的に定着したものとなった。このころから、例えば企業のなかでも、短期的なボランティア休暇制度や、長期的なボランティア休職制度を実施し始めたところがある。

日本の大学等でもボランティア・ツーリズムと実質的に類似のものがある。一般にインターンシップとよばれているものである。ただしインターンシップは、原則として大学の正規の学習プランの一環であるものであり、学生の個々のボランティア希望に基

づくものではない点で、ボランティア・ツーリズムとは根本的に異なるが、国内にしる国外にしる、本格的な仕事の場で仕事を体験するものである点では、類似のものである。

これに対しイギリスの若者を中心に組み込まれているボランティア・ツーリズム活動は、原則として、大学など学校制度の枠外にあり、しかもツーリズムたるところに多少の力点がある点に本来的特色があるものである。さらにその場合、対象地域が実際上国外にあるものが多い。これに対し、日本のボランティア活動は、種々なるものを総括して全般的にみれば、国内中心である。

日本とイギリス等とのこの違いは、多分に日本人の語学上の問題に根源があると思われるが、この点で興味深いことは、わが国では英語の *tourism* にあたる言葉に「観光」と「ツーリズム」の2つがあり、適宜使い分けられていることである。

ここではその詳細について論述できないが、例えば、近年人口に膾炙している「医療ツーリズム」についてみると、「医療ツーリズム」は、日本人にとっては、あくまでも「ツーリズム」という言葉でしか表わされない内実のものであり、概念であって、「観光」という言葉では表現し難いものである。同様なことがボランティア・ツーリズムにも妥当する。

わが国の「観光」についての一般的な常識的な考えからすると、現在のところでは、「観光客として観光先でボランティア活動をする」ということは考え難いのではないか。このことは、そうした行為のあることを否定するものではない。ここで言わんとすることは、そうした行為は「ボランティア・ツーリズム」と表現されることが適当であろうということである。

日本人による海外におけるボランティア・ツーリズム、あるいは外国人による日本でのボランティア・ツーリズムも、今後盛んになることが期待されるが、ただし、西欧の場合と比較するようなときには、まず、西欧で「ツーリズム」といわれるものには、単なる旅行、すなわち「定住地を離れて目的地に行く行為」だけを意味するものもあることが注意されるべきである。

従って、西欧等で盛んなボランティア・ツーリズムには、「ツーリズム」をそのように考えて、「定住地からとにかく離れた土地へ行ってボランティア活動をするもの」という意味のものもある。上記で、西欧のボランティア・ツーリズムは、実質的には日本のインターンシップに類似したものと述べたゆえんである。

さらにこの場合、西欧ではツーリズムという場合、実質的には国外ツーリズムが中心になっていることが留意されるべきである (A2, pp.13,55-56)。ただし、これは多分に、西欧では国いっても地域が小さく、少々遠方に行く場合も「国外ツーリズム」となる場合が多いためである。これに対しアメリカや中国のように国土の広い国では、旅行する距離だけからいえば、西欧の「国外ツーリズム」も「国内ツーリズム」となるような場合が結構ある。西欧の「海外中心的ツーリズム論」はこうした西欧の事情に起因している面がある。

他方、英語もしくは英語圏でいうツーリズムの論議について

は、ボランティア・ツーリズムは、根本的な点で画期的な意味をもつものである。その点は何よりも、ボランティア・ツーリズムでは、とにかくツーリズム先においてツーリストがその土地のニーズにこたえ何らかのボランティア活動をするものであるところに、示されている。こうしたことは、これまでのツーリズム（論）の考え方、端的にはツーリスト文化（考え方）の論議にはなかったものである。

というのは、これまでのツーリズム論は、とりわけ 20 世紀に盛んになったマストツーリズム論を含めて、基本的にはすべてが、ツーリストとはとにかく所得をツーリズム先で消費する顧客であり、ツーリズム先で何らかの楽しみを提供されるものであって、ツーリズム先でツーリズム先の必要にこたえて何らかの労力などを提供するというような考えは、なかったからである。ツーリストのツーリズム先に対する関心は、高度にエゴ的なものであるというが、旧来のツーリズム論の基本的見解であった (W1,p.164)。

これに対しボランティア・ツーリズムは、ツーリズム先の何らかの必要・要望を充たすことをモットーとするものである。イングラムのいうように、そうした必要・要望に対しボランティア・ツーリストが提示するものは、所詮、先進国を基準にしたものであるとしても、そこでは、ツーリスト側の事情よりもツーリズム先の事情が優先することは間違いない。故にこれは、ツーリズム（論）におけるコペルニクスの転回といってもいいものである。少なくとも現在のツーリズムには、こうした種類のものがあり、今後盛んになる傾向にあることは注目されるべきことである。

ただし、ボランティア・ツーリズムの全体的な位置づけでは、ボランティア・ツーリストは顧客ではなく、労働提供者である、しかも報酬の必要がない労働 (unpaid labour) の提供者という見解もある (Mp.198)。それは、前掲のマラウイの学校の例にもみられる。ボランティアだから無償は当然としても、このような安価で便利な労働提供者という見解は、結局、ボランティア提供者側の意向あるいは利害のいかに依存するものとなって、新植民地主義論的傾向を助長することがあるものであると言わざるをえない。

ちなみに、上記でみてきたように、やや特色ある議論を展開しているイングラムの所論についていえば、それは基本的には、ポスト・モダン論の立場にたつものである。ポスト・モダン論の最も特徴的な根本命題は、「旧来あった区別・境界は消滅しつつある」というところにある。イングラムもこの考え方にたつ。この点は、今や仕事とレジャーの境界は消滅しつつある。ボランティア・ツーリズムはまさに、ボランティア活動（仕事）とツーリズム活動（レジャー）との間の区別・境界が消滅しつつあることを象徴するものであると主張するところに、端的に表現されている。

従ってイングラムによると、ボランティア・ツーリズムは、現在では、バックパッカー旅行と並ぶ「ニッチ (niche; 隙間)・ツーリズム」の 1 形態で、言われるほどの特段の意義はないという位置づ

けのものとなる。真のボランティア・ツーリズムの実現のためには、地元とのパートナーシップ関係の強化が必要である。これがないとすれば、ボランティア・ツーリズムの特徴である「違いを作ること」もできない、と主張している (1pp.212-214; ポスト・モダン論的ツーリズム論について詳しくはΩ 1,10-13 頁およびΩ 3 をみられたい)。

こうしたポスト・モダン論に対し、ツーリズム一般についてであるが、2000 年ワンは、そもそも現代のツーリズムはモダンの産物であり、モダンの根本原理である合理主義的思考を超えたものではないと主張している (W1,p.16)。この点は、ボランティア・ツーリズム論では、どのように考えられるものであるのか。議論があるところであろう。

最後に一言。日本（語）における「観光」と「ツーリズム」との違いの問題に戻ると、日本（語）でいう「観光」と、英語でいう「tourism」とは同じものではないという観点からは、日本（語）で「観光」という場合については、これを英語で示すときにも、tourism とすることなく、そのまま「kanko」と表現するのが望ましいと考えられる。津波が、英語でも「tsunami」となっているようにである。

#### 【参考文献】

- A1: Alexander,Z./Bakir,A., Understanding Voluntourism: A Glaserian Grounded Theory Study, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.9-29.
- A2: Aramberri, J., *Modern Mass Tourism*, Bingley:Emerald, 2010.
- B1: Benson,A.M., Volunteer Tourism: Theory and Practice, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.1-6.
- B2: Benson,A.M., Volunteer Tourism: Structuring the Research Agenda, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.240-251.
- B3: Brown,S./Lehto,X., Travelling with a Purpose: Understanding the Motives and Benefits of Volunteer Vacationers, *Current Issues in Tourism*, 2005, Vol.8,pp. 479-496.
- D: Daldeniz,B./Hampton,M., VOLUNtourists versus volunTOURISTS: A True Dichotomy or Merely a Differing Perception? in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.30-41.
- F: Fee,L./Mdee,A., How Does it Make a Difference? Towards 'Accreditation' of the Development Impact of Volunteer Tourism, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp. 223-239.
- I: Ingram,J., Volunteer Tourism: How Do We Know It Is "Making a Difference"? in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.211-222.
- J: Jones,A., Assessing International Service Programmes in Two Low Income Countries, *Voluntary Action*, 2005, Vol.7, pp.87-99.
- K: Kearsley,G./Schneiderman,B., Engagement Theory: A Framework for Technology-based Teaching and Learning, *Educational Technology*, 1998, Vol.38, pp.20-23.
- M:Mosedale,J., Diverse Economies and Alternative Economic Practices in Tourism, in: Ateljevic,I./Morgan,N./ Pritchard,A. (eds.), *The Critical Turn in Tourism Studies*, London: Routledge, 2012, pp.194-207.
- N: 中村憲治/松本秀人/敷田麻実「『労働』と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究」『2008 年度日本観光研究学会・口頭発表要旨』インターネット・アクセス、2011 年 8 月 30 日
- R: Rochster,C./Ellis Paine,A./Howlett,S./ Zimmeck,M., *Volunteering and Society in the 21th Century*, Basingstoke: Palgrave, 2010.
- S1: Schott,C., Young Non-institutionalised Volunteer Tourists in

- Guatemala, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.53-70.
- S2: Stebbins, R.A., *Between Work and Leisure*, New Brunswick: Transaction Publishers, 2004.
- U: Unruh, D.R., Characteristics and Types of Participation in Social World, *Symbolic Interaction*, 1979, Vol.2, pp.115-130.
- W1: Wang, N., *Tourism and Modernity: A Sociological Analysis*, Amsterdam: Pergamon, 2000.
- W2: Wearing, S., Recentering the Self in Volunteer Tourism, in: Dann, G. M.S. (ed.), *The Tourist as a Metaphor of the Social World*, Wallingford: CABI, 2002, pp.237-262.
- W3: Wearing, S./Stevenson, D./Young, T., *Tourist Cultures: Identity, Place and the Traveller*, Los Angeles: Sage, 2010.
- W4: Wearing, S./Grabowski, S., Volunteer Tourism and Intercultural Exchange, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.193-210.
- W5: Wickens, E., Journeys of the Self, in: Benson (ed.), *Volunteer Tourism*, 2011, pp.42-52.
- Ω 1: 大橋昭一『観光の思想と理論』文真堂、2010年
- Ω 2: 大橋昭一/渡辺朗『サービスと観光の経営学』同文館、2001年
- Ω 3: 大橋昭一「現代レジャー理論の一考察—ポストモダニティ・レジャー理論を展望して—」『和歌山大学・観光学』第5号、2011年7月、7-17頁
- Ω 4: 大橋昭一「現代マスツーリズムの特性についての一考察—バナル・マスツーリズム論の展開—」『関西大学・商学論集』第56巻第2号、2011年9月、69-93頁。

受付日: 2011年9月22日

受理日: 2011年11月30日